

フアツシヨと東洋思想の進出

早稻田大學教授
政治學博士 五 來 欣 造

一

明治大帝の御治世に於ける日本の最も偉大なる事業は、明治三十七八年の戰役である。我が日本は此の一舉に依つて世界の大舞臺に躍出し、所謂五大強國の一にまで列したのである。而も曾て我が鋒刃に破られたるロシアは、今や非常なる勢ひを以て逆襲を企て來たり、巧に我が弱點を突いて、精神的危機に迫らせてゐる。實に憂慮すべきものは、現下の危激なる思想問題である。我々も如何にして此のロシアの思想的逆襲を防ぐべきかについて、頗る心を痛めた者であるが、此の時烈しく頭腦を刺戟したのは最近歐洲に於けるフシシズムの新運動である。それで急に思ひ立つて、一路先づ伊太利に赴き、次いで佛・獨・英の諸國に轉じ、最後にロシアの實情を視て歸つた。こゝには其の間の觀察を素材として、聊か私見を述べて見たいと思ふ。

二

フアツシヨとは何か。一言之を蔽へば、無目的な數の政治に墮してゐる所謂るデモクラシーの國家に對して、眞の國家の目的を教へんが爲に生れたものである。西洋の議會政治は個人主義から生れて、唯物主義に墮し、利己主義に趨つた。そして他の一方では又、勞資兩階級の利益の衝突が、共產主義的運動を激成し、其の究極する所はロシアの革命となり、伊太利も亦これに踵いで、赤旗を翻した。フアツシヨは即ち、伊太利の此の危機に際して、祖國を擁護せんが爲に起つたものであつて、これは其の語義が自ら示すやうに「東」に成る事である。離れ離れな個人の烏合的多數に對する秩序ある「結束」其のものである。毛利元就が子供に各一本宛の矢を與へて其一本を折り試みさせた後、更に殘餘の矢を一東にさせて、「結束」が示す強復な力を實證的に教へたのと、同一の意義を持つものである。ムッソリニは即ち、此の東の主義を提げて、先づ勞働者側の利己主義を斷壓し、國家を財政の破綻から救うた後、改めて又資本家側の利己主義に強壓を加へ、多數の勞働者を失業から救うた。即ち伊太利のフアツシヨは、階級的利己主義に對して國家本位の立場から經濟統制を行うたのである。此のフアツシヨが其手段として暴力を用ゐたのは甚だ遺憾であるが、それには伊太利といふ國が特殊の不健全状態にあつたことを考慮せねば成らぬ。兎に角、フアツシヨは、銘々が階級的利己主義に趨つて愛國の大義を忘れてゐた伊太利人に對し

て、愛國心を注入し、剛健なる青年教育を鼓吹し、國家を道德國家たらしむるに努力したものであつて、其の目的の爲にムッソリニは儒教即ち東洋流の思想を取入れた。そして東洋流の考を基調として、國家本位の階級調和を行つた。これは我々東洋人から觀れば、正に東洋思想の歐洲進出である。

英國へ行つて見ても、やはり同じ傾向が強く現れてゐる。此の國でも曾ては労働者の利己主義的な運動が可なり烈しく行はれ、ポンドの下落も其爲だと觀られた程であつたが、マクドナルドの内閣が起つて、國家の危機を説き、此のまゝの狀態では國家は滅亡する、此の際總ての國民が、或る階級のみの利益に執着せず、國家全體の利益の爲に犠牲を拂はれたいと熱叫して、賛否を總選舉に問うた結果は、遂に暴力を用うる事なくしてファッシヨが行はれた。伊太利人と異つて、愛國的な英國人は、マクドナルドの警告演説を聞いただけで、翻然と階級的利己主義を捨て、國家全體の利益に一致したのである。

次に獨逸へ行つて見ても同じ事である。此の國では一九一八年に革命を起し、帝政を覆して共和政治を立てたが、その結果は労働階級に媚びて、一方的な政治を行つたが爲に、全體的に餓死の窮況に陥り、遂に外債の重荷に堪へかねて、哀を列國に乞ひ、戦債のモラトリアムを歎願せざるを得ざるに至つた。そして之を救はんが爲に立つたものは、やはりファッシヨの一團であつた。其の他地でも、濠洲あたりでも、特に或る階級のみの利益に偏した政治を行つた國は、皆失敗してゐる。ヒットラーの如きは早

く此の點に目覺めたものであつて、露骨に犠牲を要求こそしてゐないが、間接には労働者に犠牲を要求して、部分の利益よりも全體の利益を重んぜよと教へてゐる。

斯の如くフアツシヨは、労働者にも資本家にも偏黨せずして、全體の利益を圖るのが特色である。最近國家社會主義を唱へる人々の中には、資本家は營利をするのが悪いとして單純に非難するのを見受けるが、營利の觀念があつたればこそ今日あるを得たのであつて、それを除き去つて了へば、國は飢饉に陥る外はない。故にムッソリニ、マクドナルド、ヒットラー等は、労働者系の人であるが、一概には營利を排斥せず、資本家の前にも手を伸べて階級の調和を圖り、全體の爲の利益を説いてゐる。そんなわけで、或る階級のみの部分の利益を犠牲にして、國民全體の利益を重んずる精神は、全歐洲に溢れてゐる。眞に自己を愛するものは、社會を愛し國家を愛する。故に又、全體の爲にするといふ事は、結局自己の爲にするといふ事である。此の心持を基調として國民が愛國心に一致すれば、即ち其處にフアツシヨが存するのである。尤も、フアツシヨも伊太利の如く暴力を以て行ふに至つては、甚だ不健全でフアツシヨ其のものゝ本旨を逸するものであるが、英國の如き、獨逸の如きは、巧に中道を行つて、或る程度までの獨裁政治に成功してゐる。そしてそれが、全體の爲——國家のため、國民のため——に、自己を犠牲にして進む東洋精神の進出に因るといふ事は、我々の注目すべき所である。